The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国近代の社会変動と「幇」(パン)結合
Author(s)	蜂谷, 庸子
Citation	年報人間科学. 1981, 2, p. 61-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12629
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国近代の社会変動と「幇（パン）」結合

蜂谷庸子

一、序

二千年にわたる家産官僚制による支配体制の解体と、近代的社会主義国家の成立とを帰結した中国近代期の社会変動は、二つの局面をもっている。

第一の局面とは、秦漢帝国以来の各王朝末期に反復的に生起して「易世革命」(1)成立の諸条件を醸成した、類型的な社会解体現象である。その主要因は、支配階級の腐敗や失政、人口過剰と生産力の低迷、相継ぐ自然災害、軍事費の膨脹による国家財政の逼迫などである。これらの原因が招来した、経済生活の破綻による群なす破産農民の流離、治安状態の潰滅、日常倫理・道徳の荒廃、農民反乱とその鎮圧や群雄割拠の継続による国土の戦場化などに代表される極度の解体状況が、各王朝交替期にはいつも現出した(2)。

第二の局面とは、この時期の特殊な変動局面である。その第一要因は、畢竟、中華帝国と西洋との文化的遭遇に帰着した、近代資本主義経済のアジア進出と中国の半植民地化。第二要因は内生的なもので、康熙・雍正・乾隆帝と続いたいわゆる「パクス・シニカ」がもたらした未曽有の人口爆発現象(3)である。こうした要因に誘発されて、中国史における稀有の社会変動――産業化を伴う、伝統的社会構造の全面的再編――が生じた。阿片戦争以来の相継ぐ軍事的敗北が契機となって、強力な近代国家を建設するために「西洋の力」の源泉を探ることが、これ以降、中国指導層の共有する喫緊の課題となった(4)。儒教に代わる新しい価値体系に立脚する中華人民共和国の建設に至る社会運動は、この期が産んだ新しいタイプの知識人――富国強兵の桎梏の淵源が、正統儒教思想にあることを発見して、それを放棄し、その代替物を摸索した――が、その指導的役割を担うものであった。

近代知識人に指導された革命運動の共鳴盤となったのが、社会的危機のもとで生活を破壊されつくした一般大衆――貧農や初期プロレタリアート――である。「民衆運動」とは、彼らのエネルギーの政治的表出の総称である。本稿がとりあげる「幇（パン）」(5)とは、こうした民衆運動史上の行為主体の一つなのである。

歴史学的研究は、幇を「秘密結社」と呼んで政治史的観点からのみその意味を解読している(6)。しかし社会学的立場から幇をみる時すぐに次の二点が想起される。第一に、当該中国社会が、社会構造の分化が低段階にあり機能集団が未成熟であったこと。第二に、幇の成員母体が、半公権的な保障機関としての伝統的共同体――家族・同族・村落・ギルド――を喪失した階級脱落者であったこと。この二条件から演繹されるのは、幇は一面的な政治結社に還元されえない多機能集団ではなかったか、という仮説である。本稿の目的は、幇が中国近代の社会変動のなかではたした意義を、政治史のみならず社会・経済史的にも分析できるような枠組を呈示することにある。

さしあたって「幇とはいかなる社会集団なのか」という疑問が生じてくる。その回答としては、秘密主義的で奇態な入社儀礼、組織の非公開性、団体としての非合法性および権力者に対する執拗な反抗などを幇の特性として指摘できる。こうした性格のためか、西洋人は幇を「秘密結社」と呼んで、ギルド――たとえば――などから区別した。そしてその習慣が今日の研究者にも受継がれているわけである。ところが、次にあげるエピソードは、本稿で幇の作業定義をするにあたって無視できない重要なヒントを含んでいる。

イギリスの植民地であったマレー社会では、一八九〇年に施行された結社条例の法制化が一つの慣例をうみだした。つまりそれ以降西洋人の間では、開放的で有益な「公司（ギルドに属する一種の合名会社）」と、秘密的で反逆的な「会（我々の用語法では幇）」との区別が定着することになった。他方、現地の一般中国人の用法では、あいかわらず「公司」は「会」を含み、両者は何ら区別されなかったのである(7)。つまりこの事実は、中国人、ことに権力の座についていない一般民衆にとり、幇がそれほど特異な集団とは意識されていなかったことを示唆するものである。

なるほど、西洋人や今日の歴史家が幇を「秘密結社」と呼んで、中国ギルド――同郷団体、同郷同業団体、同業団体――から弁別するのは根拠のないことではない。

社会・経済的な有力者を正式な成員とした中国ギルドは、政治史上たいした役割をはたさなかった。中国ギルドは、たとえば、都市共同体（ゲマインデ）を形成した西欧中世ギルドのようには、都市レベルでの共同体に成長して自治を獲得することも、家産制的中央集権国家に対する政治闘争によって歴史的発展の一翼を担うこともなかった(8)。この点で対照的なのが幇である。何ら技能を持たない最下層労働者を母体とした幇は、その武力闘争によって民衆運動史上無視できない集団であった。幇の社会・経済的地位に帰因するこの政治的反抗性こそ、幇をギルドから区別する際の最も重要な属性なのである。

しかしながら、民衆が両者を同じ範疇で理解していたという先ほどのエピソードは、幇とギルドが構造的・機能的に多くの類似性を持つことを意味するのではないのか？

幇やギルドをうんだ中国の伝統社会は、親族組織の発達した社会であり、諸共同体は、いわば旧中国社会の原基的集団としての家族

をモデルに構成されていた[9]。職縁団体としてのギルドも、いまだ血縁・地縁という自然紐帯原理を超克するに至っておらず、単なる経済的機能集団ではなく、成員の全生活領域にわたる諸欲求を包摂する多機能的な社会集団だったのである。他方、理論上は入社儀礼を通過した「再生者」から構成される幇の場合にも、現実上は自然紐帯原理が復活していた。幇の支配関係や結合意識は家族主義的なものであり、同職者の幇にしても同郷出身者を単位として分立する傾向にあった。加えて、幇を唯一の帰属集団とするような下層民が母体であったから、幇もまた、成員の政治・経済・社会・宗教などの生活諸領域にわたる欲求にこたえることが要求されていたわけである。

以上の考察に依拠する時、都市だけでなく農村部にも存在した幇の集団的性格を、「階級脱落者を母体とした、家の擬制に立つ、私的保障機関の一種」と仮設することができよう。こうした視角によって、第一に、中国近代の社会変動の中で、幇が対内的・対外的に多様な機能をはたしたことや、第二に、体制内的反抗（J・シェノー）に終わったこの期の幇の政治的反抗の限界の要因が、すでに行為の動機レベルに内在していたことを説明することが可能となるのである。

二、幇——家の擬制

旧中国社会の構造上の基礎単位は、家族・同族・村落及びギルドであったと言われる。個人が自律する契機——経済的自活手段、法的保障、個人主義的価値指向——は未熟であり、個人ではなく家族が経済をはじめあらゆる社会生活の単位であった。同居・同財・同爨（さん）という儒教的な大家族制の理想は、現実には、秦漢帝国以来の兄弟均分相続制の規制によって、小家族化——封鎖的な消費生活が、平均五人前後という小規模な家族を単位としていたという意味で——に偏倚していた。自然の脅威や専制国家の支配者の恣意に晒される家族の生活はきわめて不安定である。平民は、支配や協働の原理の点で家の擬制に立ち、国家からも容認された伝統的共同体、すなわち同族や村落やギルド内での協同を通じてのみ、生命・財産の実質的保障や日常的諸欲求の充足を獲得しえたのである。

深刻な社会的危機は、無産・無戸籍・無生業を属性とする「游民」を社会に排出した。それは、「良民」すなわち、臣民としての納税義務を履行する恒産有籍者とは類型的に対極的位置にある社会的カテゴリーである。親族組織の発達した農民社会の游民、すなわち階級脱落者を母体としたことが、家に類似した集団形態——帰属意識、結合原理や対内的機能の点で——を幇にとらせることになる。

誰が幇に加入するか

劉永福——（一八三七年～一九一六年）後年、幇軍団「黒旗軍」の幹部となり、ベトナムでの対フランス軍戦争や台湾での抗日運動で功績をあげ、民族の英雄として天寿を全うした——の経歴は、孤立者が幇に加入するまでの経緯を如実に物語っている。

広東省西部の郷里での小作権を失った彼の一家は、単独で近村へ移住した。ヨソ者としての彼らの生活はきわめて不安定であった。両親の死亡後、劉は浮浪者となり、炭焼や運搬の手間賃で飢を凌いでいた。すでに流寇軍化して複雑な人的構成からなる太平軍の一支団が進攻して来た時、二十一歳の劉はその流寇軍に身を投じた(10)。

家族も資産もない劉には、代わりに、自由と若さと持たざる者の投げやりの冒険心とが残されていた。この若者が深い思慮もないままに太平軍に参入することを阻む因子は何もなかった。ヨソ者で孤立者としての劉は、村落の慣習や土地に緊縛された農民のエートスや、安定した家族・宗族生活を通して内面化される伝統的倫理・道徳などから自由であった。犯罪行為の心理的枷となる連坐制を考慮する必要もない。加えて、太平天国動乱の最中で、社会はアナーキーとアノミー状態に陥っていた。軍団への参画は、むしろ、一種のヒロイズムや投機心を満足させ、下級兵士としての義務と権利は彼を心理的アノミアから救出し、なかんずく、集団帰属に伴う精神的安定と最低限度の生存とを保障してくれた。

深刻な解体変動下の欠損家族からは、えてして、劉のような青年が産まれたものである。しかるに、幇への加入が集団的に発生する典型的ケースを、中国史上戦役後つねに発生した解雇兵問題の中に見出できる。

家産官僚制下の軍隊制度のもとでは、職業軍人以外の、特に臨時の傭兵などは、討伐対象たる土匪や叛徒と同じ社会・経済的地位にあった。官軍は帰順した賊を多数編入しており、彼らにとっては、解雇は二重の失業を意味した。清朝の法律が浮浪兵士の処刑を規定していたにもかかわらず、財政の窮乏化のために、解伍兵に郷里への帰還費用さえ支給されないことが多かった。たとえ帰村する場合でも、「好人不当兵（善人は兵士にならず兵士に善人はいない）」という俚諺に象徴されるように、給与生活や従軍中の悪業に慣れて生産者のエートスや単調な生活への忍耐力を喪失した元農民の帰農は、村落農民の拒絶を受けることが多かった。

こうして、定住する土地も、生業も、伝統的共同体も持たない壮士の群れが社会に排出され、彼らは自分達の価値観や生活態度に適合する自力救済団体、すなわち幇へと集結した。たとえば、太平天国制圧前後に成長した揚子江流域の「哥老会」や、義和団の驚威的拡大に貢献した山東地方の「大刀会」は、解雇兵を母体として、周辺農村の浮浪者や無頼漢――たとえば前述の劉青年のような――を個別に吸収しつつ成長したものなのである。

他方、農村経済の解体と並行して、資本主義経済の侵入が産業構造の変容を促進するなかで、都市が急激な発展を遂げる。この期の未組織で治安の劣悪な都市部へ流入した単身の出稼労働者や游民層も、彼らの唯一の保護団体としての幇に加入した。

「飲血酒」の儀礼と「反清復明」という政治的綱領を持つことで有名な「三合会」は、華中・華南の諸都市や、この期に植民地として開発され始めた東南アジアの華僑社会に隠然たる勢力を持った。また、十九世紀半ばの漕運の杜絶により解体された水手ギルドの末裔組織としての「青幇（チンパン）」は、江南から華北への従来の運河輸送路を

中心として、揚子江中・下流域の要衝や上海などの新興貿易都市で、デラシネとしての下級労働者に社会的碇泊点を提供したのである。

農村や都市部のこの様な環境下で、生存を脅やかされた農業社会のデクラッセ分子は、帰属集団を持たず人的連帯を喪失することで、精神的飢餓――心理的アノミアや世俗的共同体帰属への渇望――にも苦しめられた。こうした物・心両面における基本的欲求の充足という加入者の潜在的な動機こそが、家に類似した構造や機能を幫に再生させることになる。

血縁的共同の意識

当核中国社会が親族組織の発達した社会であったためか、「血の盟約」はそれほど特異な約定方式ではなかった。「水滸伝」の梁山泊的結合や「三国史演義」の中の「桃園の義」に現われる血の盟約を、文盲の民衆は演劇や講談を通して知り身近な風俗を感じていた(11)。

我々が関心を持つ幫の場合でも、前述の三合会や哥老会、太平天国動乱期に飢餓農民軍団へと成長して淮河流域を寇掠した「捻(ネン)」軍なども、入社式の重要な儀礼として血盟を採用していた事実が史料に残っている。

入会に際しての神威の照覧下での血の盟約には、その誓約を呪縛すると同時に、幫員間に血縁関係を創成する機能があった(12)。血の呪縛は、一種の運命共同体としての幫への忠誠、絶対服従や幫の掟や諸活動への自発的遂行を促した。他方、血縁の擬制は血族意識を醸成する。三合会の成員は内輪では「洪家の息子」と呼び合っていたという。このように、親族的な共同生活の主観的な基礎を形成する血縁の擬制は、同時に、血縁関係に固有の特殊主義的属性までも復元する。

それは第一に「対内道徳と対外道徳の分裂」として現われる。たとえば、青幫がその十大幫規の中で「奸盗邪淫すべからず、福あらば同じく享くべし、難あらば同じく當るべし、仁義礼智信たるべし」(13)と定めているように、あらゆる幫が相互扶助や勧善懲悪を義務づける掟を持っていた。しかしそうした道徳律には普遍主義が欠落していた。部外者は、幫員の疎外者・生存競争の敵対者以外の何者でもなく、幫の諸活動の搾取対象・手段としかみなされなかった。いかなる文化的価値観点からみても犯罪行為としか判断できないような幫の活動は、一面この様な道徳観に支えられていたのである。

その第二は、割拠主義に現われる。入社式の単位となる支部(lodge)レベルで、同系譜の幫同志――理論上は全ての幫員が義兄弟――でさえ、対立・抗争の関係にはいる。三合会の各支部は、現実には、出身地や職業別に分立してしばしば流血騒ぎを起していた。そのため一九五九年に香港三合会を調査した香港警察副署長W・P・モーガンは、「三合会は“the Triad”というより“the Triads”と呼ぶ方がふさわしい」と述べているという(14)。法秩序の未熟や解体、経済資源の僅少による熾烈な競合、異質な風俗・言語集団の林立・葛藤する社会状況下で、三合会は支部単位で割拠し集団的利己主義を展開した。対内道徳の枠を、汎香港三合会レベルにまで拡大することさえできなかったのである。

入社式および飲血酒の儀式は支部単位で行なわれた。人間同志の親和感情を強める共食が入社式後に行なわれることもあり、幇員にとっての日常的な実質上の〈一家〉とは支部であった。相互に血を飲みかわしていない他支部とは、観念的で薄い連帯感で結ばれていたにすぎないのである。このように、血縁の擬制に立った人間結合はそれ自体の中に、特殊主義的道徳原理や小規模分立・割拠への傾向を内在させていたのである。

族的構造原理

血縁の擬制に立脚した兄弟仲間意識は、幇員間の社会関係の中に、血縁関係固有の特殊な規律の原理をも復活させる。その基本となるのは、縦の父子的な上下従属関係と、横の兄弟同輩的な親和関係とである。現実の家族や同族がそうであるように、個々の幇もこの二つの関係原理の均衡状態にあることは論を要しない。この前提をふまえた上で、二原理が対照的に現われている青幇と三合会とを例にして、族的構造特性や、その類型的特性を付与した要因を検討してみよう。

青幇の元祖は、江南の穀倉地帯から北京への運河輸送に従事した水手のギルドであるというのが通説である。漕運労働者の供給源は運河近隣諸省の農村失業者や游民であった。慣習・風俗・言語を異にする文化的坩堝としての労働者集合の新陳代謝は、過重な肉体労働や輸送途上での土匪からの攻略によって促進された。出身地や前歴を異にする壮士達を、生命の危険を伴う漕運労働という同一目的に動員するには、強力な統制や統合の手段が必要であったと言える。その機能を果したのが、羅教と「輩字の制」――族内の世代秩序関係の規制原理――とである。

運河沿線の労働者の碇泊安息所は、守護神としての羅祖への共同祭祀や信仰のための集会所でもあった。宗教的共同は、不安定な生活ですさんだ水手の心に人的連帯感と基本的道徳感とを呼戻した。一方、漕運労働の統制に最も貢献したのが輩字の制度である。入門した弟子が直接の師との間に結ぶ父子的な師弟関係は、弟子とその直接の弟子との関係にも転用された。青幇は前後二十四代ずつにわたる字輩の制定により、全成員を統一ある体統序列に位置づけて、上下間の絶対的服従と同字輩者同志の協調・連帯とで労働の達成を円滑にしていたわけである。青幇のその後の勢力拡大の可能性は、すでに、この全組織を包括する位階構造原理に内在していたと言える(15)。

他方、反清復明党三合会の場合には、入社儀礼の執行者としてのリーダーと一般成員とに分化するのみであった。政治目標達成のための合理的な役割分化や規範はなく、政治運動のための諸計画や軍事訓練はまれであったから、反清復明という政治目標は、むしろ、儀礼上の綱領に堕する可能性が大きかった。三合会は、多様な動機から加入するデラシネ苦力にとっては同郷団体や共同団体であり、犯罪者や無頼漢にとっては一種のアジールとして機能していた。

現実には――儀礼上はともかく――幇全体としての統一目標はなく、またそのために、動員や統制の手段が必要とされなかったた

めに、三合会は、儀礼的に遮断された外社会での身分や地位を一切放棄して、横の対等関係の優越する同輩・仲間的結合構造を発展させた。幇員間の対等意識や三合会の全組織を包摂する位階性原理の欠落が、前述の"the Triads"と形容されるような割拠主義発生の一因となったのである(16)。

対内的秩序の面で、縦・横二つの原理のうちどちらが優越するにせよ、血縁の擬制に立つ誓約兄弟団としての幇は、幇員からは再生者より構成される「家」と意識される。生物学上の血縁が永遠に断ち切れないのと同様、一家としての幇からの脱退は許されず、幇員は全人格的拘束に甘んじた。幇の活動が革命運動であれ単なる犯罪活動であれ、幇員はその目的のいかんに拘わらず、運命共同体の一員としてそれに参画した。我々は、幇の最も日常的活動としての経済行動の中にも、こうした家族的運命共同性の一端を見い出すことができる。

幇の経済

戦乱・疫病・災害などのために、多くの人口が飢餓線上に放擲されるような時でも、幇はその集団的利己主義を発揮することで、少なくとも良民達よりは多くの食料を獲得することができた。生業や安定した収入源を持たぬ成員を母体とした幇は、組織として、財源確保のために独自の収入の方途を開発している。

人口増大がその疲弊の一因ともなった農村部に余分な可耕地はなく、都市部にしても諸産業は未熟であったから、幇の経済活動はおのずから非生産的・寄生的・非合法的部門へと偏倚した。そうした傾向は、社会全般の経済的資源の貧困・熾烈な生存競争や法秩序の壊乱という外的社会的条件と、他方、安定した家族生活の中で陶冶される、儒教国家の従順な臣民としての価値や規範からの解離という幇員の内的・心理的要因とによって増幅されていた。

幇の専業としては次のようなものが挙げられる。国家の専売や独占のもとにあった塩や阿片をはじめとするヤミ物資の流通機構への介入、賭博場の開帳、阿片館や売春館の経営、地主やギルドの私兵、械闘要員、運搬や輸送の請負、通行税関所の私設および強盗・殺人の請負等々である。部外者に対する容赦ない搾取を基調とするこれらの営利活動は、幇員の階級性や、血縁主義に付随する「対内道徳と対外道徳の分裂」の極限的表出形態でもあった。

幇の経済状態が極度に劣悪な時や、行政権力の稀薄な山間部などで比較的少人数で集住的生活を送る時などには、同居・同財・同爨という支那的大家族生活が復元される。

太平軍の去った広西の一府城を攻略して、一介の交通運輸苦力から、莫大な破産窮民を吸収した「大成国」の国王にのしあがった広東天地会の一首領陳開（一八六一年の処刑当時四十歳）は、処刑直前の供述の中で次のように述べている。「飯があればみんなで食い、銭があればみんなで使い、衣服があればみんなで着たので、仲間に入るものがますます増えていった」(17)と。それは崩壊した家族や同族に代えて幇が再復した始原的共産体であった。

こうした共産的原理が制度化されたケースを、我々はチェルトガ

共和国（Zheltuga Republic）に認めることができる。十九世紀中葉に解禁された満州地方の、チェルトガ河畔の金脈地帯に建設されたこの国は、約二万五千人の人口――ほとんどが男子で、北支流民・追放者・おたずね者が主体であった――を擁していた。この国の経済の中心は金の採掘、農業や運送業であり、普通選挙と経済的均分とを社会の二大原則としていた。全収益は共和国内でしか通用しない有価証券の形で、全員に――行政担当者も含めて――一律に分配された。証券の一年満期制が、社会経済的平均化を保障していた[18]。我々は、無産者の絶対的均等の願望を体現したこの国の素朴な社会制度の中に、共産主義の萌芽を見い出すのである。

特定の農村社会に根をおろして土豪化した幇や、資本主義黎明期の都市の繁栄に寄生してギャングに成長した幇内部の、所有・分配様式を知る資料は手許にはない。が、そうした幇にも、家族的総有意識や共食の残滓を認めることはできる。一九二三年に大連で結成された「家裡同郷救済会」は、埠頭労働者、小商人や下級役人を集めていた。幇員の疾病者や貧困者の救済や客死者の棺の郷里送還などのための莫大な費用は、全額頭目がこれを負担した[19]。また、清末、上海の青幇大親分馬徳芳は、日々三斛（約五四〇リットル）の米を炊いて食客を養い、中華民国時代でも、杜月笙――青幇員で上海政財界の有力者――でさえ、毎月莫大な量の炊飯をしていたという[20]。

中国近代は、親族組織の発達した農業社会から産業社会への過渡期にあたり、儒教主義に緊縛された伝統的社会体制の瓦解を経験した。この期の農業社会が排出したデクラッセ分子は、血縁主義を超克する人間結合をいまだ知らなかった。彼らは相互扶助・防衛を目的とする団体としての幇の組織の範型を、伝統的社会生活の原基的集団たる家族に見い出した。幇員は、宗旨やイデオロギーを共有する同志的兄弟としてよりはむしろ、生物学的血縁上の兄弟として入会した。一種の運命共同体としての幇からの全人格的拘束や絶対的支配も、個我意識の未発達な幇員には苦にはならなかった。彼らにとっては、幇が、生存を保障し、世俗的共同体帰属の渇望をいやしてくれる唯一の社会的碇泊点だったからである。

幇は、解体状況下の農村や資本主義黎明期の都市の下層社会での人間結合の良きモデルであった。従って、中国本土はもとより、列強の植民地として発展した東南アジアや、米国・カナダ・オーストラリア・南アフリカ共和国など、苦力貿易や自費移住によって形成された海外の華僑社会の中にも、我々は多数の幇を見い出す。幇はその地で、政治史・経済史・社会史上、特異な役割を果している。

三、農村社会の解体と幇

生産力の低い前近代的な農業社会では、不自然な人口増加、自然災害や相継ぐ戦乱は、ただちに、基礎の脆弱な農村経済の均衡の破壊につながる。

中国近代期の農村経済は、様々の要因が重畳することで正に解体

の危機に瀕していた。歴代の王朝末期にいつも繰返された農民層の階層分解・一部地主への土地集中は、この期の異常な人口爆発によって増幅された。漸次流入する西洋の工業製品は、家計補助的な農村の副業を蚕食した。また阿片貿易により多大の銀が流出していたが、当時は銀本位制への移行期でもあったことから銀貨の騰貴が促進された。さらに、十八世紀末の嘉慶白蓮教乱以来、太平天国運動、帝国主義列強との軍事的攻防、軍閥割拠や国共内紛など、戦乱に明け暮れる一半世紀であった。そのため、中国近代は、厖大な量の破産農民や飢餓農民を累積的に社会に排出していた。

太平天国研究中に、アジア三大国すなわち、日本、インド、中国の近代期の暗い社会面を抽象して、それぞれを「女工哀史の国」「乞食の国」「匪賊の国」と形容したのは、清代社会経済史にも造詣の深い鈴木中正教授であった[21]。農村経済の解体から掃き出されて、幇に集結して生存を保持した中国農民の生活は、まさに匪賊[22]の様相を呈している。

農村型の幇

幇は、不用人口化した農村失業者を母体としたから、第一に、農業生産を中軸とする経済機構から締め出された中で経済的自活を達成しなければならなかった。前述の通り、幇の経済活動は寄生的・非合法的部門に偏倚した。加えて、農村社会に固有の面識関係によって識別されるヨソ者や逸脱者は、農業生産者から構成される閉鎖的な村落団体からは排除された。こうした条件下で幇の生活様式は、特定地域社会に根をおろし比較的少人数で集住的・共産的な性格を帯びるようになる。

幇の対内機能の中核は、何といっても糧食の確保——部外者に対する道徳的無配慮を原則として手段を選ばぬ——にあった。太平天国動乱の渦中に中南支の各地で割拠していた天地会各派の首領は「米飯主」と呼ばれていた[23]。幇が基本的に食糧供給源であったことを示唆している。また、辛亥革命の頃、農民層分解の先鋭化、旱魃、天然痘によって解体に瀕していた河南地方では、「腹いっぱい食べたければすぐに在園（河南小刀会あるいは大刀会の別名）へ行け」という言葉が流行していた[24]。儒教道徳に馴致された良民が餓死するような社会状況でも、幇は、道徳や法からの自由と集団的武力のおかげで食糧を確保できた。

幇の自力救済的共同は経済をはじめとして、あらゆる生活領域に及ぶ（前述の陳開の天地会の場合のように）ようになる。村落農民との間にある程度の距離を持つ山岳地帯などに定住する時には、まさに一大家族生活が展開される。

「春保山紅幇（ホンパン）」[25]は失意の読書人盛春山を山主として、一八七四年に江蘇省東海県の某所で立幇式を挙げた。組織は、全権を掌管する「山主」、軍事指揮者としての「老大」、司法担当の「老五」や最下級の兵卒職たる「老九」等に地位が分化していた。この厳密な地位分化は、平等主義に立つ兄弟仲間的結合体の対内的秩序維持や、山塞の防衛・匪賊活動時に統制の円滑化に役立った。一方、幇務で廃疾した者に対して「老公」という恩給生活者の地位を設けていた事

実は、貧窮者の共産体として福祉的側面を制度化していたことを物語っている。

農村部の幇の集住的共産生活が、事実上、行政権力の真空の中で、一般農民社会からも隔絶して経済的自活の道を見い出して成長し続ける時、究極的には前述の北満州のチェルトガ共和国の如き集産主義的な社会が建設される。この国は一八八〇年代に最盛期を迎えた後、清・露両国の協力で二十世紀初頭に破壊されてしまったが、この史料を発掘した研究者の議論を要約すれば、この共和国の繁栄の主要因として次の四点が指摘できよう[26]。(1)行政システムの制度化。(2)地理的孤立による凝集性の高さ（酷厳な自然条件下の開拓初期の北満州の地にあって、この共和国からの追放は事実上の死を意味した）。(3)外社会との有効な交換財たる金資源の確保による経済の安定。(4)清朝の地理的・社会的辺境として権力中枢からの圧力を被りにくかった、という諸条件である。

このような〈大土匪共和国〉は、幇の集住的・共産的生活の拡大が長期的安定を保った限りでの極限的形態である。幇一般はやはり農民社会の周辺部にあって、農民達と特殊な関係を結ぶ――それゆえ幇は解体期農民社会の特有の構成員ともなりえたのだが――のが普通であった。

アウトロー集団としての幇と生活の破壊された一般農民との境界は不明瞭になることが多い。太平天国期淮河流域を跳梁した捻軍が飢餓農民を同族ごと編入したように、幇による他部落への略奪遠征には多くの一般農民が便乗した。また、満州開拓農民の間でうまれた「紅鬍子（ホンフーツ）」の一頭目、白馬長の「十三ヵ条の名誉ある掟」[27]は、生産農民の道徳律の残滓をうかがわせる。強姦や無益な殺生を禁じ、掠奪に際しても被害者の社会的地位に則して多くの制約を設けていたし、死傷した家族の面倒をみることも義務づけていた。この事例は、不法な集団的略奪行為も、一面において生存維持のための必要悪であり、幇の形成が正常な村落生活回復までの過渡期的生活様式であったという解釈を許す。

仮に、幇と農民集団とが分離して幇が農民をくいものにする――「官匪」が農民を搾取したように――ような時でも、両者は同盟して専制的国家に対峙する――農民の武装蜂起に典型的なように――など、幇は農民の生活に特異な関わり方をしている。

幇と農民

幇は農民にとって本質的に、両義的でアンビバレントな存在であった。なるほど、幇は農民社会の辺境に位置して、農民の生産活動には寄生・略奪という様式でしか関与しない犯罪者であり、かつ、賭博場や売春館を経営して良民を堕落させるなど、農村の醇風美俗を攪乱する有害な異邦人ではあったが、反面、農民社会に特殊な貢献をしたからである。幇自身の縄張り防衛は当該地域社会を外敵から保護したし、治安が低下した時には、幇が国家官僚（マンダリン）に代って秩序を回復することもあった。また、従順な農民の世論を代表して貪官汚吏や悪徳地主を威嚇したし、ヤミ物資の販売が貧農の家計を助けることもあったからである。このように、専制国家の粗放な地方行

政下では、幇が農民の政治・経済・社会などの生活諸領域に深く関与する素地が多分に残されていた。

無産者を母体とする幇は、保護費の名目で不法に農民から金銭を徴収したり定期市を荒廃させるなど、農民経済の疲弊を招く要素を多分に持っていた。しかし、幇の利己主義的な営利追求も、時として一般農民とその利益を分有することがある。

人体維持の必須食品たる塩の生産や流通は、王朝の重要な財源として、前漢の武帝以来政府が独占していた。しかしその独占や恣意的経営とが私塩の秘密ルートを発展させた。運搬時に胥吏が砂土を混入することが日常茶飯化していたために、官塩は高価な上に悪質であった。それとは対照的に幇の販売する私塩は、安価な上に良質であった。春保山紅幇は正価の三分の一の価格で売却していた[28]。

また、中国近代期の社会解体のために、退廃的風潮が社会に弥漫していた。現実からの不健康な逃避を可能にする阿片の吸飲は、政府の厳禁にも拘わらずその需要は減退しなかった。幇にとり阿片の密輸や管煙所の経営は恰好の財政源であり、密輸人は政府収買価格より高く買い上げ運送にも農民を雇ったりした[29]。

流通機構に介入することが多かった経済活動や定着農耕民を主体とする農村社会での文化的・社会的辺境性などに帰因する浮動性は、幇に特異な社会的働きをさせる。紅鬍子がそうであったように、「鏢局」と呼ばれた運送業者と協定して、警察行政の行届かない地域での人や物質の交通や運送の安全を保証したのも、官兵ではなく幇であった。それに、相互のコミュニケーションの方式を持たない閉鎖的な村落共同体間の接衝の仲介を幇がすることもしばしばであった。こうした社会的浮動性や平素からの行動範囲の広さが、農民反乱時にその運動を村から村へと連動させる原動力となる。

一地域社会に根をおろした幇は、行政府の警察力の低下に伴う権威の失遂とは反比例的に政治的勢力を拡大していく。たとえば、孫文の革命運動に連坐して処刑された湖南三合会の一頭目馬福益（一八六五年～一九〇五年）が、省部長沙に近いギャンブルのメッカ渌口の町の治安を回復したりその他の義賊行為によって、約一万の住民の支持を獲得した[30]ように、農村部でも、他の一般土匪の攻撃から農民を守るような幇は農民の尊敬の的となる。

十九世紀に、行政権力の手薄な江蘇・山東・河南・安徽の省界地方に蟠踞した「捻（ネン）」の場合、同族保護の目的から、捻に加入する族員のために助成金が用意された。村落に捻がいることで平和が保証されたからである。同族員達はよく言ったものである。「某伯父がもし捻でなければ、たとえ科挙試験に受かったところで、今ほどの名誉を獲得することはなかったろうて」[31]と。

捻は、その後太平天国動乱期には多数の破産農民を村ごと吸収した飢餓農民軍団に成長し、政府軍の手で掃滅されたが、農村社会の政治権力を掌握する幇は、土豪的成長を遂げることがある。李世忠（？年～一八八一年）は捻のリーダーの一人として登場して、太平天国軍に加担したあと政府側に寝返った人物である。彼は割拠領域内では農奴主的地主として君臨し、行政・軍事・警察・裁判・経済的権力を壟断して、事実上の軍閥的小王国を形成していた[32]とされ

る。

李世忠の処刑の原因が、経済的・政治的勢力を恃んでの政府権力に対する不忠誠にあったように、幫は一般農民とちがって権力者への無条件的服従や卑屈な阿諛から自由であった。幫員が農民のように土地や家族から縛られることがなかったからである。そうして社会的・心理的にマージナルな位置が、彼らを良民的な日常道徳や規範の桎梏から解放することを促した。こうした内的心理的条件に支えられて、幫はしばしば権力者――マンダリンや地主――に武力闘争で挑戦したのである。幫は確かに多くの農民蜂起の先鋒をかついだ。しかし、その動機は集団的利己主義の追求か私的な義憤――せいぜいのところ――にすぎなかった。政治運動の主体として幫の性格が両義的で、体制を変革する契機が欠落していたことについては後述しよう。

以上のように、幫は農民社会の特異な構成分子であり、農村経済の悪化や政治的無秩序は両者の間に特有の共生関係を成立させた。幫は生産農民社会の異邦人であり、農民をくいものにした。が、その集団利己主義的活動も、時として良民層に利益をもたらした。あくまでも制度的社会構造上の正式な単位集団ではない幫は、そのままで農民社会に定着できる存在ではない。農村経済や治安状態の回復、諸産業の捻興を伴う社会全般の近代化は、社会解体がうみおとした社会的カテゴリーとしての幫の存在を意義なからしめるのである。

経済生活の好転により自力で良民としての生活を回復する――満州の紅鬍子のケースのように――ことのない幫は、窮極的に次の二つの方向をたどる。

第一の方向とは、強大な国家権力の手で完全に掃滅されることである。内憂外患に苦しんだ晩期清朝政府の軍事力の一部は、常に国内の各地にあいついで噴出し匪賊化した幫の撃退にあてられた。ところで、事実上、「匪賊の国」の汚名を完全に返上するには、中華人民共和国の成立を待たねばならない。

たとえば、一九五〇年の人民解放軍による匪賊狩りによって、湖南省の場合、同省にいた匪賊の九割に相当する十二万人が逮捕もしくは処刑された[33]。旧中国にあっては、農民は匪賊の報復を恐れて彼らにはむかわなかった。だからこの快挙は、もはや賊を多数混入する〈兵匪集団〉ではない解放軍をやっと信頼しはじめた農民の協力の賜であった、と評価できよう。

司法の領域でも近代化路線を歩みだした人民政府は、裁判で匪賊を処罰するようになったが、判決の前には主要な犯行現場に連行して大衆の査問に付した。北京郊外の天壇で開かれたある査問会には一千人近くの聴衆が集まった。マイクロフォンの前で犯罪を告発した被害者の一人の纏足の老女は、無数の殺人、強姦や略奪を犯した劉を杖でさしながら次のようにことばを結んだ。「お前がこんな具合に縛りあげられようとは誰も思わなかった。窮人翻身（チュウレンファンシエン）！　ほんとうだ。貧乏人はとうとう生まれかわったんだ」[34]。ところで「翻身」の機会は罪が軽く更生可能な匪賊にも与えられた。彼らのためには

（P・73上段訂正）

「因人農場」が設置された。彼らも本来的には旧社会の矛盾の落し子であったからである。抜本的解消のためには、貧困と失業の解決が先決であったわけである。

幇がたどる第二の方向は、都市部への移動であり、その末裔は今日もなお香港や東南アジアの華僑社会で「ギャング」として生き残っている。

一九二〇年代に新聞記者として中国大陸に赴任した体験をもつ橘樸は、日本軍による台湾土匪鎮定事業の成功因を分析して、治安確立と資本主義経済開発に帰着させてから、次のように述べている。

「前資本主義時代に農村が生産の中心を為して居たやうに資本主義時代には都市が生産の中心を為す。前資本主義時代の生産中心たる農村に土匪が巣喰って居たやうに、資本主義時代の生産中心たる都市には所謂ギャングが巣喰う。」(35)と。

世界資本主義に編入されたこの時期の新興都市や貿易都市は、未熟練で廉価な限界労働力を必要とした。一方、農村失業者も生活の機会を求めてこの地へ殺到した。治安行政力の水準は急激に低下したから、この期の都市は犯罪の温床と化する。

山主盛春山の死後の内訌後に再建された、三代目「伏虎山紅幇」の二十世紀の都市部での活動は、ギャングそのものであった。袁世凱に買収されて革命党の要人を暗殺したり、強盗、殺人、喧嘩の請負、人身売買、誘拐や密輸などのあらゆる都市犯罪に手を染めた(36)。

しかしながら、幇は、この時期に新たに編成された都市貧窮者層に開放されて彼らの互助団体の役割も果した。また対外的にも、多

幇がたどる第二の方向は、都市部への移動であり、その末裔は今日もなお香港や東南アジアの華僑社会で「ギャング」として生き残っている。

一九二〇年代に新聞記者として中国大陸に赴任した体験をもつ橘樸は、日本軍による台湾土匪鎮定事業の成功因を分析して、治安確立と資本主義経済開発に帰着させてから、次のように述べている。

「前資本主義時代に農村が生産の中心を為して居たやうに資本主義時代には都市が生産の中心を為す。前資本主義時代の生産中心たる農村に土匪が巣喰って居たやうに、資本主義時代の生産中心たる都市には所謂ギャングが巣喰う。」(35)と。

世界資本主義に編入されたこの時期の新興都市や貿易都市は、未熟練で廉価な限界労働力を必要とした。一方、農村失業者も生活の機会を求めてこの地へ殺到した。治安行政力の水準は急激に低下したから、この期の都市は犯罪の温床と化する。

山主盛春山の死後の内訌後に再建された、三代目「伏虎山紅幇」の二十世紀の都市部での活動は、ギャングそのものであった。袁世凱に買収されて革命党の要人を暗殺したり、強盗、殺人、喧嘩の請負、人身売買、誘拐や密輸などのあらゆる都市犯罪に手を染めた(36)。

しかしながら、幇は、この時期に新たに編成された都市貧窮者層に開放されて彼らの互助団体の役割も果した。また対外的にも、多「因人農場」が設置された。彼らも本来的には旧社会の矛盾の落し子であったからである。抜本的解消のためには、貧困と失業の解決が先決であったわけである。

くの民衆運動に関与したから、都市幇をギャングの一言でかたづけるのは早計なのである。

四、都市の成長と幇

パクス・シニカに帰因する異常な人口爆発が排出した莫大な量の農村失業者は、第一に、未開拓であった内陸四川方面の山岳地帯――嘉慶白蓮教乱の舞台――・満州・台湾・東南アジア諸地域への農業移住者として、第二に、この時期世界資本主義に編入されて急激な成長を遂げた都市部での未熟練労働者として吸収されていった。

(1) 特に十八世紀末以降顕著になる華南地方からの移民――自費移住者・出稼ぎ・苦力貿易の被害者(37)――が集結した、東南アジアの植民地の人口密集地。

(2) 香港・広東・廈門・上海など、阿片戦争敗北以降列強に割譲・開港された貿易都市や、内陸の河川流域の交易都市。

(3) 対ロシア政策の一環として十九世紀中葉以降入植が解禁された、旧満州地方の新興都市。

これらの諸地域の都市や港湾や鉱山などへは、土匪や游民と共に多くの農村失業者が陸続と移動した。そこは農村に較べて、はるかに多くの生活の機会があったからである。

都市貧窮民の編成と都市幇

半植民地状況下での近代中国の都市部の産業構造の激変は、新しい労働者カテゴリーを創出した。苦力……飢餓線上にある半農半工の何ら技能を持たない出稼ぎ下層労働者……の延長にある近代プロレタリアートがそれである。こうしたタイプの労働者の多くは単身の出稼ぎ者として、社会的未組織と劣悪な治安とを二大特性とするこの期の都市社会の底辺に漸次編入されていった。

中国の都市生活者の代表的な共同体としてのギルドは、苦力・阿片吸飲者・無頼漢などの加入拒絶を鉄則としていた。その上、この時期に成長した新興都市には、労働者の制度的・合法的組織は無論、そうしたギルドの伝統さえ不在であった。苦力をはじめとする最下層の未熟練労働者を待っていたのは、法律的保護もない社会的孤立、生命の危険を伴う苛酷な労働や労働チャンスをめぐっての労働者同志の対立であった。しかしこうした都市の下層社会へも、幇の伝統が流入した。幇は都市部の全ての貧窮者に門戸を開放したため、この開放性が都市社会の固有性に相乗されて、農村幇とは類型的に異なる特性を都市幇に付与することになる。

都市幇は、きわめて雑多な職を持つ相互の匿名的生活者を成員としていたから、農村幇のような小規模の集住的共産生活は営まれなかった。幇員はむしろ、入会金の納入を含む入社儀礼通過の後は、会員証や規範集の交付と秘密の伝授を受けて、職業の世界と幇の世界とで構成される二元的世界での生活を日常としていた。多様な職業に従事する成員の多数性、広域性、非合法集団としての組織の非公開性や都市生活者の匿名性という諸条件の制約を受けることで、幇員相互のパーソナルな相識関係が不可能になる。

村落生活に特有の面識関係には、共同体成員間の相互監視へと転化して、道徳律や慣習などの不文律遵守を促す機能があった。幇員間の相識関係の低下は相互監視効果の逓減を招き、幇則遵守への心理的圧力も減退する。都市幇が農村幇に較べて、きわめて洗練された詳細な会則や反則行為への厳罰を持つのは、非合法集団としての機密漏洩に対する配慮であると同時に、こうした構造的弱点に対する未然の対応策でもあったわけである。

さらには、面識関係の低下が幇所属の隠蔽性を伴うことで、幇員間の相互認知すら阻害される。そのため都市幇は〈儀礼共有体〉として、同胞を部外者から識別する特異な方策を講じていた。たとえば、漕運に従事していた水手ギルドの末裔たる青幇は、「海底問答」と呼ばれる一連の口号・隠語からなる問答を伝誦して仲間の識別手段とした(38)。三合会の場合には、茶碗や辮髪の持ち方・隠語で他者を吟味したり意志の伝達がなされた(39)。これらの方法により相互に義兄弟であることが判明すると、即刻、対内道徳や支配関係が活性化するのである。

華北・満州地区に勢力を張った青幇系の「在家裡」の場合、客の荷物に同幇固有の特殊な結ばれ方をした手拭を一本見つけた同幇員車夫は、客に乗車賃を請求しなかったし、窃盗の被害者が在幇員たることが知れると、盗品は即座に被害者に返却された(40)という。あ

るいはまた、他地へ赴いた青幇員が固有の方式で仲間を見い出すと相互に輩字を明かし合った。それによって上下関係が判明すると、たとえ初対面であろうと、両者は即刻無条件的にその支配関係を受け入れた[41]。

「反清復明党」として知られる三合会は、その組織の原型を、異族雑居を余儀なくされた広東・福建地方――同族結合が強い――出身の農業移住者が諦結した、異族間相互の規律と秩序を約した歃血結拝に持ち、やがて「反清復明」という組織目標を加えて儀礼的に整備していった[42]。この三合会のケースが示唆するように、幇は都市化することで、規範の成文化、入社儀礼や暗号などの秘密条項を含む構造的側面を整備していったわけである。

広域にまたがる成員の多数性や異質性、匿名性、瀕繁な移動などの諸条件が、相乗的に幇員間の相互監視・認知を阻害して、過度の刑罰を含む煩瑣な規範体系や、対内的コミュニケーションのための特異な儀礼的様式をうみだした。このような構造的属性のために、部外者が組織の全貌や成員間の社会関係を認知できないことが、ひるがえって、秘密の集団などというレッテルを西洋人からはられる一因ともなった。都市幇は、その秘密主義に立つ組織の合理性ゆえにあらゆる陰謀が可能となり、都市犯罪や革命的企図の温床となったのも事実である。反面、雑多な職につく苦力や未熟練労働者を母体としていたから、彼らの日常的な生活の全般に及ぶ相互扶助の団体でもあった。だから、都市幇は機能集団としても、きわめて複雑な多面的性格を持っていた。

都市の成長は一面において、治安・行政能力の回復と社会の組織化・構造分化の過程でもあるから、幇は次第に都市貧困層の支持を失って弱体化し、一元的なギャング集団へと堕することになる。

社会構造の分化と幇の変質

中国の都市生活者の伝統的な共同体組織は、ギルド――結合原理を血縁・地縁という自然紐帯に持つ――であった。ギルドはその社会・経済的発展のうえで特に、同郷出身の幇と特異な関係を結んでいる。

阿片戦争以降海外貿易の中心が広東から上海へ移行するに伴い、上海へ殺到した游民や農村失業者は、同郷別に（たとえば福建系・広東系・寧波系・土着上海系というぐあいに）幇を組織した。これらの諸幇は相互に武力抗争を起していたが、いずれも天地会（三合会）の支流であり、「上海小刀会」とはこれらの諸幇の総称である。この上海小刀会首のひとり福建系の李仙雲は同郷団体「福建泉漳会館」の、また同会首のひとり広東系の李少卿は「嘉応会館」の、いずれも董事（会館の管理者で代表責任者）を併任していた[43]。この事実は、同郷者から構成されるギルドと幇とが、特にギルドの成長の初期には未分化であったことを示唆している。

ギルドと幇との地縁に媒介された緊密な関係は、幇の武力をギルドの政治部門に編入するというかたちで制度化されることがある。

イギリス植民地行政下のマラッカの華僑社会は、福建人の同郷者から構成されるギルド、マーチャントにより実質上統治されていた。

その公所であり市役所的存在でもあった「青雲亭」は、幫を弾圧するよりもむしろ懐柔策を選んだ。治安妨害の元区たる「義興会（福建人からなる三合会支派）」を、マラッカの特別警察官に任命して治安維持にあたらせたのである(44)。

幫が、政治・経済的権力を掌握したギルドに統合されず、独自に組織の安定を確保し長期的に存在して幫員を通世代的にリクルートするような時には、ギルドや行政官庁に代替する機能を果すのである。

香港は、イギリスに割譲されてその飛領土となって以来、中国の政治的亡命者や避難民の恒常的集積地と化しており、同時に多人種が混淆する複合社会でもあったから、社会的未組織が常態となっていた。常時、華人人口の約一割を会員としていた香港三合会は、組織プランの中枢に幫員子女の学校維持のために教育部門を設けていた(45)。これは、一九五九年の香港警察副署長モーガンによる調査が明らかにした事実である。それは、地域住民の利益を尊重する近代的な行政が確立するまでは、幫が都市貧窮層の福祉を代行していたことを如実に物語っている。

急速に変動する都市社会では、幫もその多面的性格を大きく変じていく。青幫は二十世紀にもはいると、資本主義経済の浸入の門戸となった華中沿海の貿易都市や、揚子江中・下流域の交易都市の繁栄に寄生してギャングと化し、隠然たる一大勢力に成長していた。青幫――以下の観点から幫を分析する際、史料的に最もすぐれている――の変容過程を追うことは、我々に、幫の社会集団としての多面性を類型的に把握し、その類型間の移行に作用した社会的要因を分析する手がかりを提供してくれる。

前述したように、水手ギルド時代の青幫は、羅教の信仰団体という一面を持つと同時に、漕運労働者の一種の組合でもあった。漕運は清王朝の重要な職務として制度化されていたが、家産官僚制行政の粗放性の弊を受けて、監督は不充分なうえに請負制化する傾向にあったから、内部の労働者による略奪・抜荷が日常茶飯化していた。青幫の強い連帯と無条件的互助の組織は、犯罪者のアジールとしても機能しえた。青幫は、農村失業者や無産者と並んで犯罪者をその恒常的構成員とする組織的素地を、水手ギルド創始以来常時内蔵していたわけである。

水手ギルド時代には、労働条件の改善や賃上げを要求して関係官吏に示威行動を起す時には、青幫がその動員の主体となった。幫一般が鉱夫や交通運輸労働者やその他下層労働者のストライキを動員したように、青幫も一九一八年には上海大工ストライキを組織したとされる。漕運杜絶後、都市部の下層労働者一般に開放された青幫は彼らの政治行動の母体ともなった。

しかし、太平天国の騒擾による運河の破壊や海運への転換は、漕運労働者を二重の失業者（一説には約二十万人）として社会に排出した。これ以降の青幫は、上海をはじめとする諸都市の繁栄に寄生してギャングの性格を強めていく。塩の密売、売春、阿片窟経営、誘拐や殺人の請負などの都市犯罪により成長する青幫の勢力は、やがて政治的・経済的権力中枢にまで浸透する。一九二〇・三〇年代

の上海の青幇には、市の行政首脳部も含めて政・財界上層部が多数加入していたのである。

行政機能および治安の回復や、産業構造の変動下での経済生活の好転を伴う社会構造全般の再編が進む。そのなかで、都市貧窮者が漸次家族生活を取戻す一方、近代的政治結社、労働組合や各種慈善団体などの非伝統的な多種多様の機能集団が噴出し始める。孤立した都市生活者として、最低限度の生活保障を青幇加入の第一義的動機とした一般幇員の欲求水準は上昇する。その欲求充足の対象は、青幇から諸他の近代的機能集団に移り、青幇に対する幇員の依存度や忠誠心は減退する。こうして、勤労者としての生活を回復し始めた一般幇員の幇からの離脱と、青幇のギャング化とは並行して進行するのである。

このように成員の加入動機、依存率や社会集団としての機能の変化を招来した外社会の変動は、同時に幇内の結合意識や支配関係にも大きな影響を与える。青幇組織の無限の拡大可能性と構造的安定との基盤であった、「輩字の制」に依拠する家父長制的支配関係の動揺と解体の進行のなかに、それは端的にあらわれている。

上海のフランス租界の探偵から成長して、莫大な資産をたくわえた青幇の実業家杜月笙は、一九二〇年代には市の政・財界の要職に就くまでになった。経済力をバックにした彼の実力主義は、「字輩」を無視した権力の専横として現われた。こうした新しいタイプのリーダーは、営利活動の合理化を第一目標として、一般幇員を隷属的地位に落しめ対内的福祉から搾取へと重心を移す。成員の家族意識は稀薄化し、幇員は家族や労働組合などの代替集団に向けて青幇から積極的に離反していく。揺籃期の労働組合――青幇員を多数含む――運動の弾圧は、家族的結合意識や支配関係が解体する頃の青幇の代表的な行為様式である。この位相期の青幇を知る日本人は、青幇即ギャングとみなしたものである(46)。

この青幇のケースにみられるように、都市幇はきわめて多面的な性格――宗教団体、都市貧困者の互助団体、未熟練労働者の一般組合、政治結社、ギャング――を持っている(47)。産業化のもとでの都市生活全般の近代化は、反面、幇のギャング化の進行を意味していた。

都市幇は、治安警察力の強化と内部的衰退のなかで、窮極的には二つの方向をたどる。

その一つは組織の消滅である。その完璧なケースは、農村幇の場合と同様、中華人民共和国政権によって実現された。一九五九年に中国を訪問した仁井田陞博士は、「上海のごろつき退治」という小文の中で、革命後数年にして上海の游民問題が解決されたこと、またその方針が、職業および生活態度の再教育により社会復帰させるという更生的見地をとっていたことを指摘している(48)。

都市幇がたどる第二の方向は、末裔としてのギャング化である。香港はイギリスの飛領土であり、政治的亡命者や避難民がこの地に流入したと同様、幇の一部もこの地に難を逃れた。青幇の一部リーダは、共産主義勢力からの弾圧を回避するために、その財力を資本

として香港にギャング勢力を扶植した(49)。この地は今日もなお国際的犯罪のシンジケートの重要な拠点であるが、三合会や青幇を中心とする都市幇の末裔も、そのエージェント――ギャング――として延命を保っているのである。

五、結びにかえて――幇の反抗の限界

以上の例証から次の仮設が許されるであろう。「幇は、中国近代――親族組織の発達する伝統的な農業社会から産業社会への転換期にあたった――の激的社会変動のなかで、危機に陥った伝統的共同体――家族、同族、村落、ギルド――の機能不全を補修する役割をはたした。民衆運動史の領域で注目される幇の活動は、その対外的な政治機能の一面にすぎない。こうした意味で、幇は変動期固有の社会集団であったから、構造分化を伴う歴史的大変動の鎮静および中華人民共和国という強力な近代国家の成立により、幇は消滅する運命にあった」と。今後は、第一次史料の発掘・読直しという作業をふまえてこの仮設を論証していかなければならない。

さて本稿は、幇が日常生活万般にわたる相互扶助の集団たることを強調するために、政治的・社会的反抗の局面――関係史料が集中する――の分析が手薄となってしまった。そこで終わりに、本稿の作業を前提とする時いかなる視角から中国近代期における幇の反抗の歴史的意義が分析できるか、について一言しておこう。

幇についての政治史的研究の第一人者は、ソルボンヌの中国近代史家J・シェノーである。彼の著書『十九・二十世紀の中国の秘密結社』は、清王朝権力の専制や帝国主義列強への反対闘争、孫文に代表される共和制樹立運動や五・四運動から一九四九年までの間の革命運動のなかで、幇がいかなる政治行動をとったかを知る際の資料的宝庫である。シェノーは、「秘密結社」の運動が歴史的進歩の原動力であると同時に社会的反動力でもあったという両義性に着目して、それが結局中国の旧体制（アンシャン・レジーム）の枠内での反抗勢力にすぎなかったと帰結している(50)。

幇の反抗が体制内的であり――シェノーも指摘するように――、その政治的異議申立にしても、伝統主義への回帰に帰趨した旧来の「易世革命」への軍事的貢献の域を出るものではなかった。我々はこのことを、幇の組織構造、倫理や価値指向に内的変革の契機が欠落していることから傍証できるのである。

なるほど、幇には政治運動の行為主体として良民のそれに優越する点がいくつかある。第一に、大多数の幇員は階級脱落者として現体制に絶望していたから、それを破壊する願望や衝動を潜在的に持ち続けている。第二に、社会・経済的にマージナルな位置にあることで、世俗的財や現行道徳・規範から自由である。第三に、平素からの家族主義的な強い相互扶助に基づく連帯が武力闘争時すぐれた組織性を発揮する、などの点である。

幇員は伝統的共同体からはみでた階級脱落者として、社会的漂泊性と自由とを享有している。彼らは社会の支配的道徳や規範、連坐

制への配慮や定着農耕民の抱く土地や家財への執着からも解放されている。それに、日常の経済活動に要求された頻繁な地理的移動の結果、彼らの行動範囲は広く地勢に精通できたから、ゲリラ戦は幇が戦況を有利に展開するのを助けた。さらにこうした社会的浮動性は運動拡大の機動力となる。たとえば義和団のケースが示すように、農民の分散的蜂起を一村から他村や都市部へと連動させたのは、定着農耕民――敗れたり略奪に飽食するとすぐに帰村してしまう――ではなく、大刀会員や「義和拳」の教師にのしあがった道士、日雇苦力や無頼漢などであった。そしてまた、幇の家族的相互扶助の原則は政治的活動にも適用されたから全幇員を無条件的に動員できたし、その整然とした内的支配秩序のおかげで武力抗争もよく統制されることができた。こうした組織力は政治家にとり大きな魅力である。そのため孫文、蔣介石や毛沢東なども幇に同盟を働きかけたわけである。

しかしながら、これらの長所の源泉たる幇の階級性、組織の構造特性や内的心理的特性は、反面、幇の反抗を限界づける短所としても作用する。

第一に、階級的無自覚として発現する。大部分の幇員の第一義的な加入動機は、政治的反抗の意志表明というよりむしろ経済的・社会的・心理的な自力救済にある。だからそうした利害に適合しさえすれば、地主の私兵として貧農の苛斂誅求の足狗となったり、官軍に招撫されて民衆運動鎮圧勢力に変質したりもする。こうした政治的曖昧さゆえに、一般民衆を犠牲にする犯罪を平気で犯したし、反清復明党三合会諸派ですら太平天国軍から清朝政府軍へと安易に寝返ることができたのである。

第二の短所とは、政治活動を支える倫理観や行為規範の特殊主義的性格であり、それによって運動の分裂が促進された。幇が、政治行動も含めて目標の内容に拘わらずすべての活動に成員を無条件的に動員できたのは、その「一家」意識のおかげである。しかしこのため運動が「血の復讐」へと反転したり、幇相互の私的反目により運動が分断される傾向があった。高度の政治意識や政権樹立のための活動の合理的な方針は外部から補塡される必要があった。幇のこうした政治的無能力は特に、一地域を占拠した後の行政の実施段階でいつも露呈している。

短所の第三とは、価値体系レベルで反抗を展開するだけの内的要素の不在である。幇が集団構成の範型を過去の伝統に求めたように、その政治的・社会的理想も過去指向的である。幇の代表的スローガンはいくつかある。そのうちの一つ「打富済貧」とは、貧困にあえぐ中国農民の伝統的・普遍的な運動目標である。それはせいぜいのところ所有物の分配率に多少手を加えるという改良主義にすぎない。また、「替天行道」「反清復明」などのスローガンは、孟子に理論化された「革命思想（天命を受けた者が政権の座につく）」の民衆的理解と変革願望との産物である。彼らが期待する現政権放伐後に来たるべき政治構造とは、天命を受けた高徳の名君を頂点とする家産制的支配体制なのである。それらには、反抗を価値レベルにまで遡及させて旧社会の正当性原理をつき崩し、易世革命ではない真の

革命を達成するだけの斬新な世界観やイデオロギー的契機は欠落している。

これらの短所のために、家族的利己主義活動の直接的な延長線上にあった幇の冒険主義は、とうてい軍事的破壊活動の域を出るものではなく、伝統的体制を突破する力はなかった。このことは、中国近代期の他の運動形態と比較することで一層鮮明となる。

たとえば、幇員と同じ社会・経済的地位にある民衆を動員した運動のうちでも、宗教を結合契機とした集団には、政治的・倫理的反乱へと発展する要素が内在している。深刻な社会的危機を背景とした太平太国運動や白蓮教の乱がその例である。これらの宗教運動には、幇の運動と比較する時いくつかの類型的特性が指摘できる(51)。

混淆的・多神論的な宗教生活を常態とした中国農民には未知の・唯一の人格神への信仰のもとで、宗派――所属宗派以外の宗教的権威、儀礼や生活様式を断固拒否する自発的入信者からなる宗教的共同体――が形成される。神託を告げる予言者の独自の時間論、世界観やユートピアは、現世に絶望する農民にとり最もアクチュアルな救済思想として受容される。長期的な布教活動により、血縁主義――幇がその弊に陥った――克服の努力がはらわれる。その成果はまず祖先崇拝の排棄に現われる。同友――価値と理想とを同じくする――関係第一主義を基礎とする普遍主義的倫理には、生産農民の道徳観に背反せず農民を共同体ぐるみで大量に吸収できる可能性がある。救済手段としての禁欲主義は、目標の合理的追求のために自然の情動を制御する訓練となり、軍事的闘争を正当化し忍従する内的基礎をつくった。カリスマに指導される宗教運動には、このように幇の運動とは違って、価値レベルにかかわる内的変革の契機と、運動を一大勢力として拡大する道徳的普遍主義的な特性とが内在していた。

ところが、一九世紀最大の千年王国論太平天国運動の経験は、その挫折の原因が、宗教的熱狂のエネルギーを世俗的合理主義へと転換できなかった政治的無能力と共に、儒教主義の前での思想的敗北にもあることを我々に示している。

南京を首都にした建国以降の太平天国では、祖霊崇拝が復活したし、官史登用の手段として科挙試験――内容は一部キリスト教義に変更され、女子の受験が許可されはしたが――の方式が踏襲された。そのうえ「幼学詩」という新世代教育のための道徳教本は、旧社会の「三綱五常（君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友間の道徳律）」をそのまま採用していた。太平天国は、時がたつほどに儒教倫理――歴代王朝の支配体制の正当性根拠を構成した家族的恭順（ピエテート）の観念的堡塞――復活の色あいを深めていくのである。プロテスタントを範にとった上帝会（大平天国運動の組織的中枢）の教祖洪秀全は、「失意の読書人」であり、改宗・布教に先だつ二十有余年間を科挙に受かるため、ひたすら儒教的知識を研鑽することですごした。その知識こそが、非伝統的な理想国家を建設する際の思想的桎梏となったわけである。

価値レベルでの転換によって中国の伝統的社会構造を全面的に変革するためには、儒教思想に毒されていない新しいタイプの知識人

の成熟を待たねばならなかった。変革への欲求やエネルギーを幇や宗派の運動の中に表出した下層民衆をして、近代的国家の国民的自覚をもつ社会成員に新生させるには、貧困解消によって彼らの物質的生活条件を改善すると同時に、長期的な思想改造による内的変革が必要であった。近代中国がうんだ新しい知識人の系譜にある共産主義者がそれを実践した。中国史上初めての真の革命は、儒教にかえて社会主義思想を国民的価値体系の正統に据えた、これら共産主義知識人の指導によって達成された(52)。

共産主義知識人による運動にくらべて幇や宗派を核とする運動には、政治・経済・社会・思想などの全面にわたって中国の歴史を単独で大きく転轍する力はなかった。その意味で、中国近代期のそれらの反抗を伝統主義の前での蹉跌と呼ぶこともできよう。さらに我々が関心を持つ幇には、内的変革の萌芽さえ内在していなかったと評価できるのである。

注

(1) 易世革命とは、天命によって有徳の人が皇帝の位につき天意に反する者はその位を失う、という中国古来の政治思想を背景にもつ王家の政権交替のこと。

(2) 鈴木中正著『中国史における革命と宗教』(一九七四年、東京大学出版会)は、王朝交替期の大規模な宗教運動を通史的に追ったものである。終章では王朝革命の原因となった社会解体を類型化する試みがなされている。

(3) この時期の人口爆発の原因はまだ解明されていない。人口爆発と生産力とのアンバランスの一指標として次のデータをあげておこう。

(A) 人口増加	(B) 耕地面積増加率
1741年 100(1,4341万人)	1724年 100
1781年 195	1766年 108
1821年 248(3,5554万人)	1812年 116
1851年 301(4,3216万人)	1881年 133

(典拠、梁本祐平『太平天国革命の研究』1972年 同成社、pp. 51)

(4) B・I・シュウォルツ著(平野健一郎訳)『中国の近代化と知識人――厳復と西洋――』(一九七八年、東京大学出版会)は、「西洋の力」の源泉が窮極のところ制度、理念や価値のレベルにあり、それらは儒教思想と相容れないことを、厳復(一八五三年~一九二一年)の西洋思想研究の分析を通して論証した秀作である。

(5) 「幇」とは語源的には「助ける」という意味であり、訳語としては「仲間」「組合」などがあてられる。中国人の用法では、ギルドや秘密結社などに適用される。本稿はこの語を類型概念として用いることにする。

(6) 「秘密結社」というタームは、英国王立アジア協会のDr. Milneが植民地行政下の中国人結社の一部に対して一八二七年に初めて使用したものとされるが、詳細は不明である。秘密結社についての政治史的研究としては次の二冊が代表的なものである。
Jean Chesneaux, Secret Scieties in China in the Nineteenth and Twentieth Centuries (Ann Arbor : University of Michigan Press, 1971)
Jean Chesneaux (ed.), Popular Movements and Secret Societies in China, 1840—1950 (Stanford : Stanford University Press, 1972)

(7) Victor Purcell, The Chinese in Southeast Asia, Oxford University Press, 1965 pp. 272～274.

(8) 中国ギルドの経済勢力の強大とかたや政治勢力の弱小の原因は、家産主義国家の専制的行政力や自然紐帯にあるとされる。清水盛光『支那社会の研究』一九三九年、岩波書店、第二章参照。

(9) 中国の伝統的共同体が家の擬制に立脚していたことについては、松本善海「舊中國社會の特質論への反省」『東洋文化研究』九号、一九四八年、参照。

(10) Laffey, Ella S., "The Making of a Rebel : Liu Yung—fu and the Formation of the Black Flag Army", J. Chesneaux (ed.). op. cit. pp. 85～96.

(11) 相田洋、「水滸伝の世界——中国民衆の観念的世界」『歴史学研究』、第三九四号、一九七三年。

(12) 「血盟俗」に関して清水博士は、「血縁創造機能」から「契約呪縛機能」へと発展するというダヴィの一般論を認めつつも、「三合会」の義兄弟間で、親族義務の最重要な慣行としての「服喪」が義務づけられていたことを根拠として、支那の場合、前者の機能が後世まで意義を喪失していないという見解をとっている。清水盛光『支那家族の構造』一九四二年、岩波書店、二六～四三頁。

(13) 末光高義『支那の秘密結社と慈善結社』一九三二年、満洲評論社（『中國の秘密結社と慈善結社』として、一九七四年、台北より再版）、再版書の一三頁。

(14) J. Chesneaux, op. cit, pp. 33.

(15) この文脈での青幇に関しては特に次のものが参考となる。星斌夫「清代の水手について」『東方学』、第一二巻、一九五五年。森田明「清代水手結社の性格について」『東洋史研究』、一三巻・五号、一九五五年。また仁井田陞「中国社会と兄弟的仲間結合構造——浮生六記と水滸伝」（幼方・福島編、『中国の伝統と革命2』所収、一九七四年、平凡社）は、青幇が採用した「輩字の制」を解説している。なお仁井田博士はその際、青幇の横の構造を強調しているが、これは本稿の見解に抵触するものではない。なぜなら本文中でことわったように、青幇には縦・横二原理が作用しており、比較対象のとり方で二原理の優越は変化するからである。

(16) 三合会については特に、平山周「支那革命党及秘密結社」『日本及日本人』第五六九号、一九一一年。J. Chesneaux, op. cit, Chapter I.

(17) 西順蔵編『原典中国近代思想史・第一冊、アヘン戦争から大平天国まで』、一九七六年、岩波書店、四六五頁。

(18) Mancall, Mark & Jidkoff, Georges, "The Hung Hu-tzu of Northeast China", J. Chesneaux (ed), op. cit. pp. 125～134.

(19) 末光高義、上掲書、一一〇頁。

(20) 同書、一六頁。

(21) 鈴木中正、上掲書、二四九頁。

(22) E・J・ホブズボーム著（斎藤三郎訳）『匪賊の社会史』（一九七二年、みすず書房）は、その特性をきわめて高度に一般化したものであるが、中国の農村部の幇を考察する時にも想像力をかきたててくれる好著である。

(23) 西川喜久子「太平天国と宗教」『中国文化叢書、第六巻・宗教』、一九六九年、大修館書店、二六九頁。

(24) 嶋本信子「白朗の乱にみる辛亥革命と華北民衆」青年中国研究者会議編『中国民衆反乱の世界』所収、一九七四年、汲古書院、三～七頁。

(25) 末光高義、上掲書、三八～三九頁。

(26) Mancall & Jidkoff, a. a. O.,

(27) J. Chesneaux, op. cit. pp. 61～63.

(28) 紅幫の塩密売については、井上紅梅『匪従』、一九二三年、日本堂書店（上海）、七九頁。また、歴代王朝の恣意的な塩の専売制については、佐伯富「鹽と支那社会」『東亜人文学報』、第三巻一号、一九四二年。

(29) 満州国、国務院、治安部分室（漢民族社会実態調査第一編）『大観園の解剖』満州、一三五～一四四頁。

(30) J. Chesneaux, op. cit, pp. 146～150.

(31) ibid., pp. 97.

(32) 渡辺惇「清末哥老会の成立」東京教育大学東洋史学研究室編『近代中国農村社会史研究』所収、一九六七年、大安（株式会社）。

(33) W・G・ベーチェット（山田・小川訳）『纏足を解いた中国』(下)、一九五四年、岩波新書、一四七頁。

(34) 同書、一六〇頁。

(35) 橋樸「土匪とギャング」、末光高義、上掲書、四頁（序文）。

(36) 末光高義、上掲書、第二紅幫、参照。

(37) Persia C. Campbell, Chinese Coolie Emigration to Countries within the British Empire, 1971 (th. 1st, 1923), London.

(38) 井上紅梅、上掲書、一五頁。

(39) 平山周、上掲書、四二～四三頁。

(40) 末光高義、上掲書、五八頁。

(41) 井上紅梅、上掲書、二～三七頁。

(42) 佐々木正哉氏は『清末の秘密結社・前編・天地会の成立』（一九七〇年、巌南堂書店）の中で、天地会の諸起源説話の矛盾を史実に照らして考証している。そして天地会の結拝の俗に注目し台湾の「風俗志」なども参考にして、その成立が一七八六年の台湾での「林爽文の叛乱」の時期をあまりさかのぼらないと結論している。「反清復明」という儀礼上の目標を根拠として天地会即政治結社とみなすような読者は、この書をぜひとも一読すべきである。

(43) 坂野良吉「上海小刀会の叛乱」『歴史学研究』、第三五三号、一九六九年、三頁。

(44) 今堀誠二『マラヤの華僑社会』研究資料一九八、一九七三年、アジア経済出版会、第二章「マラッカの市政」。

(45) W. P. Morgan, Triad Societies in Hong Kong, 1960, Hong Kong.

(46) 青幫の類型的変容を知るには、注(15)にあげた論文のほか、特に次のものが参考となる。末光高義、上掲書、第一、青幫。酒井忠夫「現代中国に於ける秘密結社（幫會）」『近代中国研究』所収、一九四八年、好学社、四、青幫（清門羅教）。酒井忠夫「清末中国の秘密結社――青幫（チンパン）・紅幫（ホンパン）の思想と行動――」『伝統と現代』第一〇号、一九七一年。

(47) 幫は、中国の自生的な労働組合の原型でありながらも、近代的な労働運動発展の阻害因子ともなった。両者の関係はまだ解明されていない。

(48) 仁井田陞『東洋とは何か』一九六八年、東京大学出版会、一六二～一六九頁。

(49) W. P. Morgan, op. eit., pp. 76～79.

(50) J. Chesneaux, op. cit., Chapter 8.

(51) 幫と宗教運動との類型的相違は、筆者の修士論文「中国の秘密結社――解体期下層民間社会の保全と反抗――」（一九七九年、大阪大学大学院人間科学研究科に提出）の中で分析されている。なお、その最後に添付した文献一覧には、本稿で割愛された幫の史料も掲載してあるので参考とされたい。

(52) 中国革命の世界史的意義を、「毛沢東思想」を素材としてM・ヴェーバーの宗教社会学的視角から考察したものに、住谷一彦「長征と出エジプト」『思想史としての現代』（一九七四年、筑摩書房）がある。なおそこでは太平天国に対するヴェーバーの見解の解説もなされている。